

博士学位論文審査要旨

2006 年 1 月 30 日

論文提出者 近藤裕幸

論文題目

わが国旧制中学校の地理教育成立過程における地理学研究者の役割
—地理科教科書の分析を通して—

審査員

主 査	早稲田大学教授 理学博士 (東京教育大学)	白井哲之
副 査	早稲田大学名誉教授 博士 (学術) (早稲田大学)	中島峰広
副 査	早稲田大学教授 文学博士 (駒沢大学)	宮口侗廸
副 査	早稲田大学教授 博士 (教育学) (青山学院大学)	湯川次義

1 本論文の目的

本研究の目的は、旧制中学校における地理教育の教育課程論史研究のために、地理科の教科書を用いることによって、日本の近代地理学の確立と発展に貢献し、また地理教育の発展に影響力を持ったとされる山崎直方、小川琢治、石橋五郎、田中啓爾の4人の地理学研究者の地理教育観を考究し、それら地理学研究者を地理教育史上において位置づけ、学問と教育が未分化だった時代において彼らが果たした役割を検討することである。

その際の手順としては、まず中学校地理教育の制度上の時期区分をした後、4人の地理学研究者たちの地理教育観を個別的に叙述する。次に、その個別の地理教育観を地理教育方法論、教材編成論、目的論の視点から捉え、地理教育論史の時期区分をする。その後、顕在的である制度史による時期区分と、潜在的である地理教育論史のそれとを重ね合わせてとらえることで、教育現場で行われたであろう実践により近い旧制中学校の地理教育史の展開を検討する。それをうけて、4人の地理学研究者たちの地理教育史における位置づけを確定したい。

2 論文の構成

本研究の構成を目次の章節で示すと以下のようなになる。全12章からなり、序章、本論(第2章～第11章)、終章として展開しているが、このうち本論は第1編(第2章～第3章)、第2編(第4章～第9章)、第3編(第10章～第11章)からなる。

序章 研究の目的と方法……………(1)

第1節 本研究の問題意識

第2節 先行研究と問題の所在

第3節 本研究の目的と方法

第1編	旧制中学校地理科制度史と教科書検定制度	
第2章	旧制中学校地理科教育の制度変遷……………	(10)
第1節	小学校における地理科教育の変遷	
第2節	中学校地理科教育制度史の時期区分	
第3節	中学校地理科教育の成立	
第4節	中学校地理科教育の展開	
第3章	教科書検定制度と地理科教科書……………	(30)
第1節	教科書と教科書検定制度	
第2節	各時期の地理科教科書	
第3節	教科書検定制度が地理科教科書に与えた影響	
第2編	地理学研究者の地理教育観	
第4章	地理学研究者と地理科教科書……………	(45)
第1節	近代日本地理学史の時期区分	
第2節	山崎直方・小川琢治・石橋五郎・田中啓爾に対する評価	
第3節	地理科教科書と4人の地理学研究者	
第5章	山崎直方の地理教育観……………	(49)
第1節	山崎直方の業績と先行研究	
第2節	山崎直方の中学校地理教育観	
第3節	山崎直方の地理科教科書の特徴	
第4節	山崎直方の地理教育観成立の要因	
第5節	地理教育史における山崎直方の位置付け	
第6章	小川琢治の地理教育観……………	(75)
第1節	小川琢治に関する先行研究と経歴	
第2節	小川琢治の地理教育に関する論文と地理科教科書	
第3節	教科書『新外国地理 甲表準拠』の内容	
第4節	小川琢治の地理教育観の形成要因	
第5節	地理教育史における小川琢治の位置付け	
第7章	石橋五郎の地理教育観……………	(100)
第1節	石橋五郎の先行研究と経歴	
第2節	石橋五郎の地理学方法論と地理科教科書	
第3節	教育課程における地理教育の役割	
第4節	石橋五郎の地理教育観の成立要因	
第5節	地理教育史における石橋五郎の位置付け	

第 8 章 田中啓爾の戦前期における地理教育観……………	(120)
第 1 節 田中啓爾に関する先行研究と経歴	
第 2 節 田中啓爾の地理教育に関する論文	
第 3 節 田中啓爾の地理科教科書	
第 4 節 田中啓爾の地理教育観の形成要因	
第 5 節 地理附図から見た田中の地理教育観	
第 6 節 地理教育史における田中啓爾の位置付け	
第 9 章 地理教育制度史に位置付けた地理学研究者の地理教育観…	(146)
第 1 節 中学校地理科教育の成立期	
第 2 節 中学校地理科教育の展開期	
第 3 編 戦前地理教育と地理学研究者	
第 10 章 地理教育論の構造と展開……………	(155)
第 1 節 教材編成論を通して見た地理教育の変遷	
第 2 節 地理教育方法論の変遷	
第 3 節 地理教育目的論の脆弱性	
第 4 節 地理教育論における変化の要因	
第 11 章 旧制中学校地理教育史における地理学研究者の役割…	(171)
第 1 節 地理教育論的視点から見た時期区分設定と地理学研究者	
第 2 節 4 人の地理学研究者の地理教育史における役割	
終章 結論……………	(181)
第 1 節 各章の要旨と本研究の結論	
第 2 節 今後の課題	
謝辞	(189)
参考文献	(190)
図表一覧	(199)

3 第 1 編 第 2 章・第 3 章の概要と論評

第 2 章「旧制中学校地理科教育の制度変遷」の概要と論評

第 2 章では、中学校地理教育史を制度史の視点からとらえ、5 つの時期区分を行っている。第 1 期は 1872～1901 年であり（「草創期」）、中学校令施行規則が出され地理教育についての規定が見られたが、後の時代のものとは比べれば、法制度上において未成熟な時期であり、第 2 期は 1902～1919 年であり（「確立期」）、地理教育についての詳細な規定がなされ、地理教育が法制度上整備され、一定の型が作られた時期であったとしている。第 3 期は 1919 年～1931 年までであり（「定着期」）、国家から教育全体において国民道徳の養成が強く求められたが、地理教育については新しい規定がそれほど見ら

れなかった時期であった。第4期は、1931年から1937年までであり（「転換期」）、中学校が大衆教育機関として位置づけられていった時代で、地理教育において自然と人文現象を関連付ける、いわゆる地人相関的な視点に関わる新たな規定が見られるようになった。それまで地理知識が羅列されていたことと比べれば、地理科の在り方が大きく転換した時期であったとしている。第5期は、1937～1945年までであり（「変容期」）、この時期は、愛国心の養成、皇国教育が一段と強化され、地理教育は国家からの要請を担うこととなり、大きな変容を遂げる時期としている。1943年には中学校規程が制定され、地理は国民科の教科の1つに組み込まれる。この時期には教科書も検定制から国定制へと移行し、教科書執筆において自由度がなくなったと述べている。

論評

本章で行った5つの時期区分は、地理教育を法制度上からみたものであり、本研究の一つのスケールとして活用されるが、実際に行われていた教育現場に近い位置にある教材編成論、教育方法論、目的論といった地理教育論史からの比較検討は第10章および第11章で行われている。その点で本章は本研究の枠組みの旧制中学校の地理科教育を法令や制度の面から通覧することを意図しており、その意味ではこの時期区分はそれ自身新しい提案をしたものであり、その時期区分も妥当なものといえよう。しかし本章にはこれと並んで、一般教育史に地理教育史を関連づけて展望しておきたいという意図も見られる。その観点から見ると、一般教育史にかかわる論述は、地理教育史の各時期とも概括的であり、参照した文献も概説的なものにとどまっており、他の章節の分析的具体的論述や参照文献の様子とは異なっており、その意図が十分に達成されない面もあった。

第3章「教科書検定制と地理科教科書」

本章では、本研究で主たる資料としての用いられる教科書の利用の妥当性を検討している。まず教科書についての先行研究を行い、多くの研究が小学校の教科書の研究であり、中学校の地理科教科書の研究はほとんど行なわれていないことを明らかにし、ついで教科書検定制の経過を整理している。

つぎに中学校の地理科教科書において検定制はどれほど徹底されたかを検証するため、第2章で設定した時期区分を用いて、全ての時期区分にわたって教科書と教授要目や中学校令施行規則との関係、そして同時代に著された執筆者の異なる地理科教科書の記述内容を比較し、その違いを具体的に叙述している。この検証の結果、そこでは法令が変わっても、執筆者が敢えて随わなかったり、積極的に変更したりするなど、対応の違いが見られ、また、各州別の取り扱い頁数、記述内容が異なるなど、わずかな例を取りあげただけでも、違いがあり、全く同じ記述方法や内容の教科書はないとしている。

ついで、この検討結果を踏まえて、検定制が地理科教科書に与えた影響について見解を述べ、検定制の下では執筆者の考えは反映されようがないとする見解はあたっておらず、教科書によって伝えるべき知識の範囲指定があるものの、その地理的知識の伝え方などは多岐にわたっており、教科書執筆者の自由な裁量があったと見ることができるとの見解を述べている。

論評

この章は、この論文の方法論の特色をなしている教科書の記述分析法を用いて多くの著者の教科書の比較を行ない、教科書記述の多様性を明らかにすることで、検定制度の下においても教科書は執筆者の地理教育観を知る資料として有効性をもつことの根拠を示そうとしたものである。その意味でこの章は論文の本編を構成するものではないが、この研究にとっては不可欠な部分である。それだけに論者は、草創期、確立期、定着期、転換期、変容期の全期間にわたって詳しく教科書の記述内容を比較し、法令の変化や制度の運用の在り方も考慮した検証を行っており、説得性のある論証になっていると評価できる。

4 第2編 第4章、第5章、第6章、第7章、第8章の概要と論評

第4章「地理学研究者と地理科教科書」

第4章では、日本の近代地理学史上重要な位置にある山崎直方、小川琢治、石橋五郎、田中啓爾の4人の地理学研究者を本研究で取り上げる理由を検討している。特に山崎や田中は文部省の教員検定試験(以下文検と略称)の委員であり、教員養成の面で強い影響力を持っていたことから必然性が認められるとしている。小川や石橋は文検委員ではなかったものの、小川は近代地理学形成期において山崎と共に日本地理学界において欠かすことのできない人物であり、教科書も多く著した。石橋も、人文地理学の形成に寄与したことで地理学史に位置づけられる人物であるとしている。1910～30年代の中学校地理科教科書の代表的な執筆者としては、三省堂など所謂アカデミー地理学者とは異なった人たちが編集所が首位を占めているが、山崎、石橋、小川、田中といった地理学研究者たちの教科書の出版数も多く、地理学と地理教育が未分化に近い時代状況において、この4人の影響力は大きかったと考えられ、その教科書をとりあげ各人の近代地理学研究者たちの地理教育観をたどることで地理教育史の一断面を捉えることが適切であることを論じている。

論評

この章は、第2編の初めにあって研究対象とした4人の地理学研究者を本研究で取り上げる理由を述べたものであるが、地理学史上に占める位置の重要さと教科書執筆に関わったという共通点から、この4人の地理学研究者を研究の対象としたことは肯定できる。しかし研究対象としなかった地理学者の中にも教科書執筆者はおり、また研究者ではない執筆者もあり、それらの人々の地理教育観や教科書についての言及がもう少しなされたほうがより説得性を増すものと思われる。この章は、論文構成上、章としては量的に少なくバランスを欠いており、4人についてのみであれば第2編の他の各章で個別に取り上げることも可能であったと思われる。

第5章「山崎直方の地理教育観」

1902年から1931年にかけての中学校の量的拡大期にあって、中学校における地理教育の動向を形成したものの一つに、中学校の指導的教員養成を目的とした高等師範学校の存在が挙げられる。本章

で採り上げる山崎直方はその教授陣の一人であった。また、山崎は1912年から東京帝国大学理科大学教授となり、アカデミー地理学の代表的人物とも位置付けられており、日本地理学史のうえで、その学問的足跡は大きなものがあつた。山崎は、地理学と地理教育の両分野において重要な人物であつて、このことは当時の地理教育の有り様を象徴的に表していると述べている。

山崎直方の地理教育観は地理教育についての論文から窺うことが出来るとし、それによると自然現象と人文現象を関連付けてとらえるという地理学特有の視点を地理教育にも導入しようとした。これにより山崎は中等教育における地理教育の先駆者といえるとしている。しかし1900年代と1920年代の教科書の記述内容を検討した結果では、山崎のその考えは教科書には必ずしも反映されておらず、知識を教材化する視点が欠如していたといえよう。その結果として、山崎の教科書は自然と人文に関する事象を関連付けずに羅列並列的に叙述し、詳細化した教科書の内容構成となつたと指摘している。

その理由としては当時の地理の教科書の執筆は地質学や鉱物学の研究者に依存しており地文重視となつていたこと、彼の専門が地形学であり理学的事実記載の傾向を持っていたことなどのほか、地名知識を早く人々に普及させるという当時の地理科に対する時代からの要請もあつたと推察している。

論評

山崎直方の地理学研究者としての業績については、日本地理学史にかかわつてこれまでもよく考察されてきた。しかし彼の地理教育についての業績は、その存在の重要性にもかかわらず、ほとんど検討されることがなかつたといつてよい。この山崎の地理教育観について本格的に取り組んだこの章の論考は、その意味で地理学史や地理教育史の研究にとって独創的で先端的な研究と評価できる。山崎の地理教育に関連する論文を、時間を追つて精査し、その地理教育観の特徴や変化を明らかにした上で、執筆した地理教科書を年代に分けてその記述の仕方を追跡し、地理教育観の変化が教科書の記述内容や記述の仕方に反映されているか否かの分析を行うなど実証性のある考察を試みている。こうした教科書の記述分析という方法で執筆者の地理教育観を捉えようという試みは、これまでの地理教育の研究では試みられてこなかつた方法であり、その独創性と努力を高く評価したい。

第6章「小川琢治の地理教育観」

京大教授の小川琢治に関する先行研究や経歴を検討した後、1910年代、1920年代、1930年代の執筆教科書について検討している。とくに教科書内容を、自然と人文現象を関連付ける記述の有無、直観教材の扱い方、国民精神涵養を目指す記述の有無等を中心に分析を行い、とくに例言に見られる用語の比較を行つてその変化をみている。1910年代においては地理学の概念は地図と対照して育成されるべきものとしているが、全体としては地名羅列的なものが目立っている。1920年代のものでは地人相関的記述が見られるようになるものの、内容の詳細化が見られる。1930年代になると地人相関的記載が多くなるとともに、観察の重視、写真、地図などを多く挿入する工夫をしている。とくに1933年の教科書を取り上げ、直観教材を用いて地理的事象の移り変わりを歴史的に考えさせる独創的方法を展開したことを、その例言の分析とともに示している。小川は、地理学の地人相関的理法概念を

生徒にいかにかに学ばせるかという方法主義的な立場をとるようになったが、その際歴史地理学の方法論を地理教授に取り入れ、地図・写真を有効かつ数多く用い 1933 年の教科書においてその方法論は展開されていると述べている。2 枚の地図を並べ、自然と人文現象の相関関係を生徒に考えさせるという空間的思考にとどまらず、地理的現象が変化する様子を時間的思考によってとらえさせるのが小川教科書の特徴であったとしている。また、小川は自学自習の考えも明確にもっており、それまでの教科書が教授者の講義の骨子だけを記したものが多かったことについての批判を紹介している。

論評

小川琢治は、山崎直方とともに日本近代地理学の形成期において大きな足跡を残した人物であり、多彩な活動をし、歴史地理学の創始者として知られる。したがって地理学史の観点からはこれまでも多くの人に研究されてきた。小川は中学校地理科教科書を多数残しているが、しかし小川の教科書を含めて地理教育の見地から研究をしたものは殆どない。その点小川の地理教育観や地理教育分野での活動をその教科書から明らかにしようというこの研究は、その着眼点と方法においてすぐれて独創的であると評価できる。

小川の地理教育観を解明するに当たって、長期にわたって刊行された教科書をよく調べ、その記載の観点、地図や表の扱い方、用語などに注目している。それらの教科書の時期による数量的な変化を計測しているが、これは記述分析の客観化に役立ち、分析結果に説得性を与えている。その一方で小川が教科書の中に挿入した地図類が具体的には示されていないため、連絡した挿図などの像が描きにくく、小川の意図や論者の見解の妥当性を的確に判断出来ない面が生じている。資料としての提示があってもよいところである。しかし 1933 年の教科書を特に取り出し、その例言の分析と教科書の記述分析を行なった考察は、小川が学問だけでなく教科書執筆に当たっても、地人相関的記述と歴史的思考の地理への導入を意図していたことを論証することにある程度成功しているといえよう。

第 7 章「石橋五郎の地理教育観」

石橋五郎は京大教授として活躍し、地理学草創期の地理学研究者として人文地理学の導入に努めたが、石橋の学的成果や地理学観を取り上げた先行研究は非常に少ない。石橋は中学校や高等女学校の地理教科書を多く執筆し、「地理教育論」の著書もあるが、それらの教科書の内容や地理教育観は考究されてこなかったと指摘している。

教科書の記述の検討にあたっては、「アメリカの農業」の部分を取り出し、1924 年と 1931 年の記述内容をその変化に注目して検討している。その結果、前者は地理的知識を平板に羅列的に記述しているのに対して、後者は地人相関的記述を意識し、自然と人文現象を関連付けた記述に変化したことが明らかになったとしている。ついで「地理教育論」の分析を行ない、その概要を見た後、発達段階と地理教育の問題、地理教育の目的についてその主張を整理している。また他の教科書執筆者と異なって石橋は男女別の教科書を意図的に著しており、女子の地理教育について見解を紹介している。ついで石橋の地理教育史での位置づけを試みている。第 1 は、地理科の知識を上から下へと教授していた

時代で、教科書における羅列的記述を避け、地理学の手法を地理教育に取り入れつつ、そうしながらも地理教育での法則定立の考えを退け、地理学と地理教育を混同しなかった点である。第2に、教育課程における地理教育の位置付けを論じ、地理教育の目的を明確に論じたことであるとしている。

論評

著者の指摘するように、石橋五郎は地理学草創期の研究者であるが、その業績についてこれまで地理学史でも殆ど研究されてこなかったといつてよい。したがって彼が「地理教育論」の著作を著し、地理教育の目的や地理学との関係を考え、地理教育の体系化を模索していたことが知られていなかった。これは地理教育史研究の遅れを示す何ものでもない。著者によって本章での石橋の地理教育上の業績が明らかにされたことは、この分野の大きな前進を意味し高く評価したい。

この章では、石橋の地理教育観を考察するに当たって、はじめに年次の異なる教科書の記述内容の状況を分析し、後段になって著書「地理教育論」の分析を行なって、地理教育史に位置づけている。論の展開の仕方から見るとこの順序は山崎の場合とは異なっている。この相違は、石橋の地理教育観を教科書の記述分析から描くとすれば、羅列型から地人相關的記述への変化を捉えるだけとなってしまう、石橋の考えていた地理教育の目的や体系を明らかにすることが困難なためと考えられる。その意味で、教科書の記述分析方法の限界を論者は自覚していると見たい。

石橋は、他の教科書執筆者と異なって、男女別の教科書を意図的に著したことを述べているが、どこがどのように異なる記述になっているのか、具体的指摘や分析が十分とはいえない。これは石橋の地理教育観を教科書から知ることが出来る可能性があるだけに惜しまれるところである。

第8章 田中啓爾の戦前期における地理教育観、

田中啓爾は、東京高等師範学校と東京文科大学において教授をつとめ、かつ長く文検の出題委員であったことなどから、戦前における地理教育界に大きな影響力を持った人物であるとし、戦後も田中は立正大学で教授をつとめ、地理教科書・地図帳の著作や編集に関わり、影響力を持ち続けたと述べている。田中に関する先行研究を検討し、田中の地誌学を中心とする業績についての研究は多いが、地理の教科書についての検討や、田中の地理教育観そのものを取り上げた研究は、小田内通敏と田中を比較した市川の研究を除いてほとんどないとしている。はじめに、田中は地理教育に関する論文を著しているので、それらにより田中の地理教育観を検討している。1920年代と1930年代の論文を見ると、教育指導上における具体的な論文が多いこと、また分布図などの直観教材や地理区に関するものなどが多く見られることを指摘し、ついで田中の地理教科書について検討を進め、とくに巻頭にある例言を重視して例言に見られる用語とその変化に注目したが、直観教材関係、知識の羅列忌避、地人相關的記述、歴史的説明、地理区など1920年代、1930年代を通して大きな変化はみられないことを明らかにしている。また地図重視を検証するために、同時期の教科書との比較を試み、田中のものが多いことを示すとともに、地理区の究明と設定、日本地誌や外国地誌の配列についても検討している。

田中の地理教育観を表すものとして、地理区の設定と地図の有効利用、地理的理法の捉え方、内容配列の独自性、ドットマップ等を挙げている。地理区の設定については、地理区論争を引き起こし、地理的理法の捉え方では、1920年代と1930年ではおおきな転換が見られたことを指摘した。一方、田中は、配列に対する考えにおいては固執せず、当時の法令に適応するという現実的な側面も合わせ持っていたとしている。石橋五郎は地理教育の系統的確立をめざし、地理教育と地理学、教育の区別をするなど理念的側面が強かったが、逆に田中の場合は目的論を論じることは少なく、より具体的な形で地理教育方法に対しての知見を提示した。その理由は、田中が教育現場にある教師たちの視点に立っていたため、田中が師範学校や中学校の教諭経験をもち、現場からの視点を失わなかったことや、各地の中学校教員を対象とした講演を行うなどの活動が多かったことも反映されている。このことが従来の知識降下型の地理教育とは異なる、教育現場の実情をふまえた地理教育観を形成することになったとし、大学からの系譜と教育現場からの系譜が収斂したところに田中は位置していたとの見解を述べている。

論評

田中の地理教育観を教科書の分析を通して明らかにしようとするにあたって、他の執筆者については教科書の記述そのものの引用やその比較を試みたが、田中については、教科書の例言に見られる用語を直観教材関係、記述方針、配列、地理区、その他に分けて、年次の異なる教科書ごとに整理しその傾向を検討するを行なっている。また地理教育論文についても同様な用語一覧表を作成しその分析をおこなっている。これらによって田中の地理教育論文が終始実践的であり時期によってあまり変化していないことや、教科書ではドットマップなど直観教材の適切な使用により、地理的な理法を理解させようとしていたことなどを見出しておりの彼の地理教科書の特性を捉えることに成功しているといえよう。

しかし、小川の教科書分析の場合と同様、その特徴とする教科書の地図類の資料としての提示がなされていないため、「文字情報中心の教科書」から「地理学的地理教材」そして「教育的地理教材」への展開の具体像を描くことがやや困難になっている。

第9章「地理教育制度史に位置付けた地理学研究者の地理教育観」

第5章から第8章までで見た4人の地理学研究者たちの地理教育観を、第2章でなされた地理教育制度史による時期区分に重ね合わせることによって、地理教育制度史が旧制中学校の地理教育史の分析フレームとして有効であるか否かについて検討し、さらに、草創期、確立期、転換期、変容期の各期について地理科の教科書と地理研究者の動向を述べている。

しかし、このその4人の動向については、必ずしも法令の変更とは一致しないため、地理教育史の内実を検討するためには新たな視点が必要となってくる。それが第10章において述べる教材編成論、教育方法論、目的論といった所謂、地理教育論からの視点である。

論評

この章は第2編で個別に論じた4人の地理学研究者の地理教育観をまとめであるとともに第3編の地理教育論的考察へのつなぎをしている。確立期では山崎と小川の共通性と相違点を、定着期では山崎と石橋に見られる事実羅列型の記述の共通性を指摘している。変容期では石橋の「地理教育論」と田中の「地理教育に関する論文集」の目次の比較を行なっているが、これらの研究者相互の比較検討が全員について行なわれていないのは惜しまれる。

5 第3編 第10章・第11章の概要と論評

第10章 地理教育論の構造と展開

本章では、地理教育制度史の見地からではなく、4人の地理学研究者に見られた地理教育観を、教育学の視点である教材編成論、教育方法論、目的論を指標として、「地理教育論」の視点から地理教育史を捉え直し、そこに見られる転機と、内在的、外在的原因を検討している。その結果、教育方法論では1923年、教材編成論では1928年、教育目的論では、1937年においてそれぞれの転機を見いだししている。これらの転機の原因は、教育方法論では中学校の大衆機関化との関係性が見られ、教材編成論では地誌記述の伝統的傾向と、還元主義的方法論の関連性や、地理学の方法論からの影響を見いだすことができたとしている。教育目的論については総じて地理教育史上探求されることは少なかったと指摘している。教材編成論は特に地理学から、教育方法論は中学校の大衆化という社会的状況の影響をうけたとみられると推測している。

論評

これまでの地理教育史の研究分野では、教育学の視点を取り入れて、教育制度史、教科書史などの観点や教育課程、地図など部分的な学習指導方法の変遷について検討されることはあった。しかし、地理教育論を教育方法論、教材編成論、教育目的論と多面的分析的に分けた上でその時間的変容を検討しようとする試みはなされてこなかった。この教育学的3分野の視点を入れることで、概括的に捉えていた地理学研究者の地理教育観がどのようなものであったかを明示することが出来、それとともに表面的になりがちな制度史を越えての変化を追跡することが出来るようになった。その意味でこの教育学的視点からの地理教育論の構造と変遷を検討したことは高く評価できる。

第11章「旧制中学校地理教育史における地理学研究者の役割」

この章は、この論文の結論としての考察を行なった部分である。考察は地理教育論的視点から見た時期区分の設定と、4人の地理学研究者の地理教育史における役割の2つに分けて行なっている。

a. 地理教育論的視点から見た時期区分設定と地理学研究者

具体的に言及すれば、第2章でなされた地理教育制度史から見た時期区分と、第5章から第8章まででみた4人の地理学研究者たちの地理教育観を、教材編成論、教育方法論、目的論との関係を検討するため構造図を示している。横軸として、山崎ら4人が本格的に活躍した、1900年から1945年までの時間軸を設定し、縦軸に第10章で見た地理教育論つまり教育方法論、教材編成論、目的論を配置し、

その下に地理教育制度と一般的な教育制度を併置し比較できるようにしてある。この図を用い、具体的に教育方法論では1923年、教材編成論では1928年、教育目的論では1937年において転機があったことを明らかにしている。地理教育方法論は、地理教育制度の変遷と比較すると、大幅に時期がずれて暗記中心の授業の転機が見られ、教材編成論では教育制度や法令よりも先行して、地人相関的な教科書記述が見られ、目的論については制度や法令に沿った形で転機をむかえており、法制度からだけでは捉えられない新たな時期区分をすることができたとしている。それぞれの時期の特徴は、1922年までは「知識羅列型地理教育の定着」の時期、1923年～1928年の間では背景としては社会状況等からの影響を受けたが、地理学から方法論が導入された「地理学的方法論導入の開始」の時期であったとしている。1928～1936年の間では自然と人文現象を因果的にとらえる、いわゆる地人相関的な考え方が取り入れられたことから「地理学的視点導入の開始」の時期としている。1937～1945年までは、地理教育の体系化が行われた時期でもあったが、一方で地理教育の目的論が取り上げられる最後の年でもあり「地理教育体系化の試行」の時期であったとしている。

b. 4人の地理学研究者の地理教育史における役割

この地理教育論史の観点からとらえ新たな時期区分に、山崎・小川・石橋・田中を位置付け、各地理研究者が地理教育史においてどのような役割を果たしたのかを検証し、4人の地理教育史における役割を類型化という形で表している。

①地理学的地理教育型の山崎直方

山崎は地理学研究史からみれば、近代西欧地理学を留学によって身につけ、帝国大学で自身の研究と後継者を育成した人物であり、その地理学研究の内容は当時の地理学の動向や、彼が地質学出身であることから、自然地理学の色が濃いものであったとしている。

その山崎の地理教育観は、自然地理的要素が濃いことと、自然現象と人文現象を関連づけない教科書記述の傾向が顕著に見られた。1919年に山崎が発表した論文では、専門科学である地理学と教育の異質性、地理知識の暗記学習に対して否定的見解や自然と人文現象を関連させることを主張していたものの、実際に山崎は地人相関的記述を伴った地理科教科書を著すことはなかったと述べている。

その原因は、当時の学問状況から、自然地理と人文地理の関係が重視される以前の時代であったことによるとし、地理学という学問において人文現象が重視されるのが1920年後半からのことであるので、1929年に逝去する山崎がその方法論をとりいれ、地理教育にその思想を反映するためには時間が足りなかったとしている。

教育法令と山崎の関係をとらえると、1902年に中学校教授要目が制定され、むやみに細密繁多な事実数量を記憶させることが否定されたにもかかわらず、彼が著した地理科教科書の実情は詳細化の一端をたどっていった。1903年、1905年、1906年に著された教科書において実際に地人相関的記述を見ることはできず、地名などの詳細化がなされていた。その他の執筆者による教科書をみても同様であるが、当時の地理科教科書の著者は法令に必ずしも従っておらず、検定による拘束性も緩やかであったことがいえるとしている。

②学問＝地理教育方法連携型の小川琢治

京都帝国大学の小川琢治は、山崎と並び称される地理学研究者である。1910年代の小川が著した教科書は知識羅列型のものが多く、1920年代前半では教科書内容の高度化を目指すことから詳細な記述を志向した。しかし、1920年代後半からは自然と人文現象を関連づけるという地理学的方法論をとり入れた地理科教科書が書かれるようになる。この1920年代後半におけるこうした教科書記述の背景には、山崎の時代にはなかった地人相関的内容を志向した学問的潮流が背景にあったこと、また、小川は生まれ育った家庭環境などから中国歴史にも造詣が深く、自然科学と人文科学を両立しうる素地をもっていたことも重要な要素と指摘している。また、地理学が京都帝国大学の場合、文科大学におかれ、歴史学をはじめ人文諸分野との関連性を意図したことも関係していると推察している。

さらに、1930年代に入ると、小川の教科書では地人相関的記述はほぼ定着し、その地人相関的理法概念を生徒にいかん学ばせるかという方法論が明確になってくる。すなわち、文字情報のみで知識を伝えるのではなく、教科書内の直観教材（挿図等）を増やすことで、地理科の内容を生徒により効果的に理解させることを意図しており、そこには、地理知識・情報を上から下へと降下させるだけの地理教育から、より効果的に生徒たちに教える地理教育方法論の模索の過程を見いだせるとしている。

そうした地理教育方法論の立場をとるにあたり、小川は歴史地理学の方法論を地理教授に取り入れ、時間軸を中心に据えつつ、地図・写真を有効かつ多く用い教科書『新外国地理 上中 甲表』においてその方法論は具体的に表されている。2枚の地図を並べ、自然と人文現象の相関関係を生徒に考えさせるという空間的思考にとどまらず、地理的現象が変化するさまを時間的思考によってとらえさせるのが小川教科書の特徴であったとの見解をのべている。

③地理教育目的論型の石橋五郎

小川の後継者であった京都帝国大学の石橋五郎は、1924年から教科書を著した。石橋の場合、人文中心の教科書を目指していたものの、1930年前後からは地人相関的視点にたった教科書を書き始めた。石橋が依拠する地理学において目指したことは地人相関論と法則定立の2つであったが、彼が地理教育に導入したものは、地人相関論のみであったと指摘している。

また、教育課程、地理教育、地理学との関係を捉える上で、石橋は以下の2点から地理教育史上重要な位置づけが可能としている。第1は、地理科の知識を上から下へと教授していた時代で、教科書の羅列的記述を避け、地理学の手法を地理教育に取り入れつつ、そうしながらも、地理学と地理教育を混同しなかった点である。第2に、石橋は、1937年『地理教育論』を著し、この書において系統的に地理教育論を構成し、教育全般(教育課程)における地理教育の位置づけを論じ、地理教育の目的を明確に論じたが、石橋には地理知識をいかんして伝えるのかという教授方法等の方法論の点において具体性に欠けていたことが指摘できるとまとめている。

④方法論追究型の田中啓爾

地誌学中心の学風をもつ田中啓爾は前三者と比較すると、もっとも後に生まれ、かつもっとも長命であった。そのため、田中のみが戦前戦後にわたり地理教育に影響を与え続けることができた。田中

は留学後 1923 年に東京高等師範学校教授，文検委員となり，地理教育界の中心的地位につく。

先行するアカデミズム地理学に属する人々と比較するとき，田中の位置づけがより明確になるとしている。山崎，小川，石橋との関連性で捉えると，山崎は自然重視の立場をとり，教科書の内容が羅列される傾向があったが，田中は当初は自然重視の傾向も見られたが，自然と人文相互の関係，または人間から自然へと働きかけることにも意を用いた。また，小川琢治が依拠する歴史地理学と，田中の「地位層」とは類似し，時間から捉えた地理学の側面があるが，田中の場合はアメリカ留学時代に教えをうけたデーヴィスによるものと考えられ，その出所は異なっていると指摘している。石橋五郎は地理教育の系統的確立をめざし，地理教育と地理学，教育の区別をするなど理念的側面が強かったが，田中の場合は目標論を大きく論じることはなく，方法論に力点をおき，より具体的な形で授業に対しての知見を提示してきたとの見解を述べている。

田中の地理教育観は，現場にある教師たちの視点に立っており，それは田中が東京高等師範学校の教授で，各地の中学教員を対象として講演するなどの活動が多かったことが反映されたものと考えられる。急増する地理教員に対して，地理学習の方法を具体的に示す立場にあったともいえる。そして，このことが従来知識降下型の地理教育とは異なった立場をとるにいたったとしている。大学からの系譜と現場からの系譜が収斂したところに田中は位置していたと位置づけ，1920 年代後半に発表され 1930 年代に盛んになった「地理区論争」にも象徴的に表れているとの考えを述べ，学問上でも教育上でも論争を引き起こしたという事実は，田中の立場を象徴していると指摘している。また，田中は活動期間が長期に及ぶことから，戦前，戦後と橋渡しになった存在として検討の余地がある人物である。田中の戦前における地理教育観は，学問観と密接に結びつき，かつ現場への配慮が行き届いているものであったことを指摘できるとしている。

このように 4 人の地理学研究者たちは，地理教育制度の影響を受けながらも，独自の見解を示し，それぞれの考えが複雑に錯綜しながら，地理教育を作り上げ，地理教育史の上で位置付けられるとしている。

論評

この章は，前段の地理教育論的時期区分の設定と後段の地理学研究者の役割の部分に分けて結論的考察を行なっている。次の終章結論は，本論文の各章のまとめと今後の課題としているので，この章は地理教育論的時期区分の設定のみにとどめ，後段を終章にする論構成とすることも考えられる。

地理教育論史の視点から，新たな時期区分を行ない知識羅列型地理教育の定着期，地理学的方法論導入期の開始（1923 年），地理学的視点導入の開始（1928 年），地理教育体系化の試行（1937 年）を提示している。このことは，地理教育史の課題である地理学が地理教育に与えた影響の内容とその時期を明確に示したことであり，本研究がこの課題に応えたことを意味している。後段にあっては，この地理教育史の時期区分に対応して，地理学を代表する山崎，小川，石橋，田中の 4 人の地理学研究者の地理教育観と地理教育に及ぼした影響，その果たした役割を考察している。その際，各研究者の果たした役割を端的に類型化する形で示す工夫をしており，これにより本論の明快な結論が導きださ

れているといえよう。

終章 結論

終章とした結論は、各章ごとにその要旨を述べている。ついで旧制中学校地理教育の成立過程と地理学研究者の役割について考察した本研究を総括して、旧制中学校の地理教育を形成した存在としては、アカデミー地理学者ではない人物たちの検討は今後の課題であるものの、戦前地理科においては、学問と教育が未分化の時代であったことから、今日以上に教育に対して影響力をもっていた地理学研究者たちが、教育方法論からも、教材編成論の面でも、また目的や体系を考える点でも、地理教育の骨格をつくりあげる役割を担ったことがわかったとしている。その過程と役割は、具体的には、執筆した教科書の記述分析をすることで研究対象とした4人の地理学研究者の地理教育観やその変化を捉えることで、ある程度描くことが出来た。それは地理教育史における類型化という形で表現すれば、地理学的地理教育型の山崎直方、学問＝地理教育連携型の小川琢治、地理教育目的論型の石橋五郎、方法論追究型の田中啓爾ということになるとしている。

7 総評

わが国の地理教育史研究を進める上で、地理教育と地理学とはどのように関わりあい、地理学研究者はどのような地理教育観を持ち、どのような影響を与えてきたかといった課題は、きわめて重要な課題である。概括的には、地理学研究者は地理教育に強い影響力を持ったということはいわれているが、しかし地理学研究者の地理教育観や地理教育への関わりについての実証的研究は地理学史からも地理教育史からもまったくといってよいほど取り組みがなされてこなかった。本研究はこの課題に着眼し正面から応えようとするもので、きわめて独創性にとみかつ実証性豊かな意欲的な論文となっており、この研究の地理教育史に占める意義は極めて大きなものがあるといえよう。

この論文で取上げた4人の地理学研究者は、いずれもわが国近代地理学の創設期を代表する研究者であり、地理学の発展と地理教育への貢献には大きなものがあるとされてきた。その地理学へ発展への寄与について、地理学史、地理思想史などの分野からこれまでも研究されてきたにもかかわらず、彼らの地理教育については研究されることがなかった。この論文は、4人の地理学者について、執筆地理教科書の刊行状況などの地理教育との関わりを明らかにしたこと、その地理教育観の検討を行い地理教育への影響を考察したことは、地理教育史の分野にとって画期的な業績であるだけでなく、地理学史の面からも特筆すべき業績であると高く評価できる。

この論文は4人の地理学研究者の地理教育観を検討するにあたって、主としてそれぞれの執筆教科書の記述の仕方とその時期的変化に注目して各人の地理教育観を分析するという実証的手法を行なった。このことは検定制度下ではあっても教科書を研究上の資料として用いることの有効性を確認した上で行なわれており、研究の信頼度高めるものになっている。こうした教科書記述分析の方法は、一定の限界はあるとしても、少なくともこれまでの地理教育の分野では試みられてこなかった創意性に満ちたものとして評価できる。

地理教育論に教材編成論、地理教育方法論、目的論などの教育学的視点を導入し、その観点から各研究者の地理教育観を捉え直し、その時期的な変化を検討している。この教育学的視点を入れることで概括的にしか捉えていなかった地理学研究者の地理教育観がどのようなものであったかを具体的に示すことが出来るようになった。また制度史的時期区分とは別に地理教育論史的時期区分が可能となり、さらには、制度史の時期区分とこの地理教育論史の時期区分のずれを見ることで地理学的視点の地理教育への導入の時期を捉えることが出来、地理学研究者が地理教育史のどのような時期にどのような役割を果たしたかを明らかにすることが出来た。またこの研究を通して、未開拓であったわが国の中等教育の地理の教育状況の一端が明らかになってきた。これらの本研究の成果はわが国の地理教育史研究に大きな前進をもたらしたものとして特筆に値すると評価できる。

論文構成上、一部に改善を試みる余地を残しているが、そのことが本論文の地理教育史研究にしめした独創性や実証的成果の価値を少しも損なうものではない。

以上から、本論文は研究者としての高い資質と能力を持つことを示したものであることを認め、審査員全員一致して博士(学術)の学位授与に適うものと判断したことを報告する。